



纂編 伯畫 哉光 河石
集畫 名教 宗歐 西



筆クーレブ。ムアリ井 神見のブヨ

（聖書二十四記ブヨ）あつてた見をたてしな目は今がしりたみき聞ては耳を事のたれぬ

第六輯 目次

赤子をうけ、病者と伴なるキリスト（素描）	レンブラント
放蕩子息の歸家	レンブラント
ラザロの蘇生（二色版）	ジヨットオ
悔改めし婦人	チ、アノ
ダンテ、アリギエリ（二色版）	作者未詳
死の勝利部分畫（二色版）	オルカニア
マノアの犠牲	レンブラント
ヨブの家庭（素描）	井リアム、ブレーク
現象（二色版）	グスタフ、モロー
レンブラントの肖像	レンブラント

東 諸 南 橋 堀 長 區 南 市 阪 大

行 發 館 字 十 田 飯

番 二 三 七 八 一 阪 大 替 振 番 九 九 四 六 南 長 話 電

大 正
14. 8. 17
内 交

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35

始





畫題、ダンテ、アリギエリ Dante alighieri.

作者、未詳

所在、フイレンツェ

リカルディアナ圖書館 Biblioteca Riccardiana.

解説、ダンテの肖像で有名なのは今フイレンツェのウツツォ、グロツツォの二所に、グロツツォにありて描かれた、ダンテ廿五歳より卅五歳までの肖像である。ウツツォはダンテの友であつた。周知の名畫家でダンテが有名なウツツォ、メオツォ(醫生)を著作した頃に近い血氣の肖像で、つよみさしなこゝろを具した姿である。そしてこの畫はほとんど全部消してゐるに彼の肖像の部分のみが現存しているのは嬉しい。(中略) 畫點もあるがこれは畫に就いて「伊太利人」と「英人」二人の指方により今より八十五年前に發見せられたものと云ふ。

ダンテの顔が文、ミケランゼロの描いたローマ、シヌチン禮拜堂の大聖遺物館の畫の圖中にもキリストの傍近く聖徒達の中に描かれてゐるらしいと云はれてゐる。

今ウツツォ、グロツツォの二所にある肖像は、今もフイレンツェのウツツォ、グロツツォの二所に、グロツツォにありて描かれた、ダンテ廿五歳より卅五歳までの肖像である。ウツツォはダンテの友であつた。周知の名畫家でダンテが有名なウツツォ、メオツォ(醫生)を著作した頃に近い血氣の肖像で、つよみさしなこゝろを具した姿である。そしてこの畫はほとんど全部消してゐるに彼の肖像の部分のみが現存しているのは嬉しい。(中略) 畫點もあるがこれは畫に就いて「伊太利人」と「英人」二人の指方により今より八十五年前に發見せられたものと云ふ。

今ウツツォ、グロツツォの二所にある肖像は、今もフイレンツェのウツツォ、グロツツォの二所に、グロツツォにありて描かれた、ダンテ廿五歳より卅五歳までの肖像である。ウツツォはダンテの友であつた。周知の名畫家でダンテが有名なウツツォ、メオツォ(醫生)を著作した頃に近い血氣の肖像で、つよみさしなこゝろを具した姿である。そしてこの畫はほとんど全部消してゐるに彼の肖像の部分のみが現存しているのは嬉しい。(中略) 畫點もあるがこれは畫に就いて「伊太利人」と「英人」二人の指方により今より八十五年前に發見せられたものと云ふ。

今ウツツォ、グロツツォの二所にある肖像は、今もフイレンツェのウツツォ、グロツツォの二所に、グロツツォにありて描かれた、ダンテ廿五歳より卅五歳までの肖像である。ウツツォはダンテの友であつた。周知の名畫家でダンテが有名なウツツォ、メオツォ(醫生)を著作した頃に近い血氣の肖像で、つよみさしなこゝろを具した姿である。そしてこの畫はほとんど全部消してゐるに彼の肖像の部分のみが現存しているのは嬉しい。(中略) 畫點もあるがこれは畫に就いて「伊太利人」と「英人」二人の指方により今より八十五年前に發見せられたものと云ふ。



畫題、現象

石河光雄畫集解説

作者、グスタフ・モロー Gustave Moreau (一八二六—一八九八)
所在、パリ ルクサンブルク美術館 Musée du Luxembourg

解説、十九世紀のフランス畫壇はドラクワム(Draqueau, 1817-1870)の瀟灑主義、タームバール(Termbar, 1810-1870)の寫實主義を経て印象主義が勃興し初めた。その中心人物はエドワール・マネである。

新鮮な空氣の中で早くも好んだのである。即ち色彩は光線の作用によつて變化する云々ののである。故に彼等は外光論と呼ばれ畫壇の中よりはしかしこの中であつて現象よりも、極く理想を重んじた畫壇にビロビド・シャザンヌがあり(第五卷參照)グスタフ・モローがあつた。彼等はオスマンナル一面、風流、華麗、優雅な繪を描き、象徴や神話の表現を好んで居た。

グスタフ・モローは特に神話論者と呼ばれてゐる。かのオベロン、アルドンの英雄者であつて、エドモンよりはもつと神聖でじつであつた。超自然的な畫家であつたらしく、彼の畫壇を訪れる者、若人はモローの藝術に好意を有つことが出来なかつた。彼は、親しみにくい作風であつた。しかし一度バリーの「オベロン」を「モロー」の彼の畫壇に登場させた後、その無数の努力のたまを認るに及んで、彼に對する敬慕、その作品から来る一種格で新しい崇拜、賞讃を感じ初めたのである。

彼は近代人であつた。此にあらざる畫壇を修得し、繪畫の科學的手法を、熱心に追究して居た。しかしそれは彼の觀念や象徴の爲の手段であつて、必ず彼の製作はマヤ化され、原始的な自然や、巫術にけられた人間が織り込まれて居るのである。彼の取扱ふ物象や人物は必ずしも我等から遠くはない。その金銀貨や高價な磁器、或は身を委せる現實の人間、彼等はまた常に私にさいたまふ。幸福な、また不幸な人々である。その色彩の、第一調には畫壇の觀念が息づいてゐる。故に現實的なが如くして實は象徴の世界を向はせる。世の趨勢や富貴に對する羨望がある。故に一旦その繪の磁器の如き細い感觸によつて、若人の魂は反響されるけれど、じつと彼の手法の眞意に據つて來てそこに畫壇の眞實がしつかり若人の心をとらへるのである。彼はフランス人の繊細な感情とワレンス人の如き深い幻想を有し、夫を不斷の努力によつて常人の習性を超え、高遠にまで登らして居る。然しながら彼は實の意味に於けるレイマン(平人)であつた。

そのことは彼の無數の習作を見れば直ちに了解されることと思ふ。

この「現象」はモローの同時代のシャザンヌ等、前編に於ける法若「ハネ」(第五卷參照)と對照して見ると意味深くあるであらう。まさに即ちモローの母によつて直線たる「法」になつた。モローの藝術に於ける自然は如何なるものであつたらう。然るに義人の言はる如く「モローの藝術の代として提供せられて居たのである。法に當る我等の疑問は義人の解答して之にて終止を告げたのである」と云ふ事である。由來之に於て詩人法が創作した。かの「オスマンヌ」は有名な戯曲の一である。

こゝに於ては詩人法が創作した。ハネは現象として復したことを想像したのである。そして兵士の劍によつて鎌を無き者とする事が出来た。思ひ、悲愴なる「ヘチ」を以て、女が愛する思ひをなす事なく、せめて若き「モロー」の舞臺前には今し「ハネ」の影が現はれたのである。若人はを單に「モロー」の肉の彫刻としての見ではたらない。また「若の魂の現れと見たくない。かの「マク」に現はれたる「セー」の「セー」の深き淵が、良心の高き水鏡をなした如くに、義人は今自問によりて活くるものなきことを深く信じて、正義が遂にこの世から消滅するものでないことを信ずりたい。

そして我等は單に之を一つのドラマとして、象徴畫として眺むるに止まらず、その藝術的意圖の裡にこそ、畫壇の深い深い眞實の力を高みたく思ふものである。



終